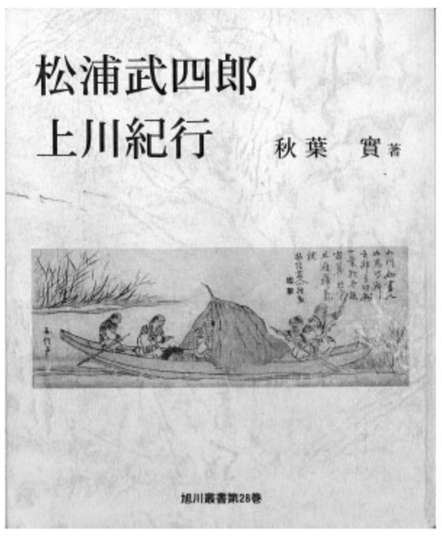
断章
旭川のアイヌ語地名研究 ㊸
高橋 基

―ハルシナイから上流の地名③―

前回は、ハルシナイから上流の国道12号の歴史を見てきた。今回は、今年の四月十一日に八十八歳で亡くなられた秋葉實氏の書かれた、『松浦武四郎　上川紀行』(平成十五年刊行、旭川叢書第二十八巻)から、**掲載地図**の「ハルシナイ」と「アソナイ」の地名解の検討をさせていただく。

周知のように、秋葉實氏は、松浦武四郎の著作を解読・紹介し、松浦武四郎の業績の評価を高め、その著作を通して北海道の近世後期のアイヌ史解明に多大の貢献をされた。昭和五十九年から平成二十一年まで、松浦武四郎研究会会長を務められ、平成九年のアイヌ語地名研究会の立ち上げにも参画され、晩年までアイヌ語地名研究会顧問もされていた。

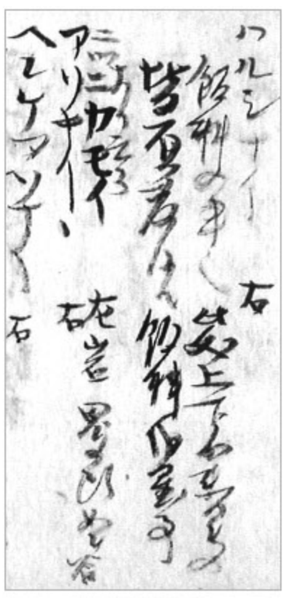


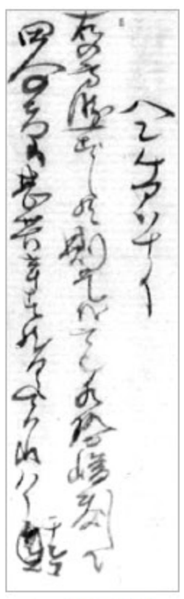
写真①②は、それぞれ松浦武四郎の自筆であるが、秋葉實氏の解読がなければ、一般的には読解できなかった。アイヌ語地名研究では、秋葉實氏の解読がなければ、松浦武四郎関係の正確な地名解はできなかった。

『松浦武四郎　上川紀行』は、本稿でも取り上げている、松浦の「再篙石狩日誌」や「登加智留学知之誌」の紀行内容を、簡潔で分かりやすく、かつ、内容深く紹介している。その中から今回は、ハルシナイとアソナイの地名解を実例に沿って検討させていただく。

写真①は、松浦武四郎が、安政四年(一八五七年)に持参した野帳(フィールドノート)の『巳第二番』のハルシナイからペンケアソナイまでのシイピラサ(五十二歳)からの聞き書きの部分である。(以下、解読は全て秋葉實氏によるものである)

「ハルシナイ　右
飯料の事也。此処上下より来るもの皆負荷にて飯料置るより云り
ニツニカモイ　左岩　鬼の頭如也有
アソナイ　右
ヘンケアソナイ　右」


写真①


写真②

この野帳を元に、「再篙石狩日誌」では、次のように解読されている。

「ハルシナイ―右の岸小川、幅六間計急流也。ハルは食物の事也。此処下るものも上るものも、此処え飯料置処なるが故に号る也。(以下略)」

この部分は、『松浦武四郎 上川紀行』では、「ハルシナイとは食べ物の多い沢という意で、トレプ(大姥百合)とかプクサ(行者葫)などの食草が豊富で、(以下略)」と、知里真志保の地名解を書いている。

丸木舟時代は、シキウシバとハルシナイ間は、激流のために丸木舟が通れず、上りも下りも荷物を背負い運搬したので、ハルシナイに携帯食料をいつも置いていたので、ハルシナイ(haru-us-nay 携帯食料・いつも置いてある・沢)と名付けられた―との伝承は、『上川紀行』では、残念ながら省かれている。

写真②は、「再篙石狩日誌」のペンケアソナイの前半部分である。秋葉實氏の解読文では、次のようになっている。

「右の方滝一すじ有。則是を云也。水勢峻敷して四人の者は甚苦辛す。(以下略)」

秋葉實氏は、右の文の「右の方滝一すじ有。則是を云也」から、アソナイは、間宮林蔵のデータによる二枚の地図にある、「ヲショナイ(o-so-nay 川口・滝ある・沢)」であると指摘をされた。

しかし、秋葉實氏が読まれたヲソナイは、底本の市立函館図書館本の誤写で、松浦武四郎の記録は、**写真①②**を含めて全てアソナイである。したがって、当時の呼称はアソナイで、アソナイ(as-o-nay 柴木・多い・沢)と推量される。

秋葉實氏の松浦武四郎文書の解読と、『松浦武四郎　上川紀行』の名著刊行に、深甚の謝意を表して、結びとさせていただく。**(アイヌ語地名研究会幹事)**

※毎月第1週号に掲載します